発達障害児の保護者を対象としたPBSに基づく学習会の評価

Evaluation of learning sessions based on the PBS for parents of children with developmental disabilities

平　澤　紀　子
Noriko Hirasawa

岐阜大学大学院教育学研究科
Gifu University, Graduate School of Education

要　旨

本研究は，発達障害児の保護者を対象としたPBSに基づく学習会について，保護者の記録と評価を基に効果と課題を検討した。幼稚園から高校までの自閉症等のある子どもの保護者14名を対象として，年5回各2時間の学習会を実施した。学習会は，保護者の困りを子どもの具体的な行動として分析する子育て支援シートを用いた解説とグループワークから構成された。その結果，学習会が進行するに伴い，保護者の記録では，目標行動や手立てが具体化し，子どものできる状況が記述されるようになった。また，保護者による事後評価では，子どもの理解や対応の見通しが促進し，とくに子どものできる状況とできない状況の理解は9割を超えた。一方，対応の実行や子どもの行動改善については6割台に留まった。以上から，保護者の困りを具体化して分析する学習会は，実際的な子どもの理解や対応の見通しを促進するといえる。ただし，対応の実行や行動改善には個別の検討が必要である。

Key Words：発達障害，保護者支援，学習会，PBS
developmental disabilities, parent support, learning sessions, positive behavior support

Ⅰ．問題と目的

発達障害児の支援においては，子どもに対する直接的な支援とともに，保護者に対する支援をどのように構築するかが重要な課題となっている。こうした課題に対して，環境との相互作用から人間の行動を分析し，それを基に効果的な環境を構築する応用行動分析学から，多くの研究成果が示されている（Stocco & Thompson, 2015)。

そのアプローチには，主に2つの方向がある。一つは，保護者を共同治療者として，保護者に専門的対応を教授するものである（例えば，山上，1998)。もう一つは，保護者を生活者として，保護者のもつ情報から，日常環境において実行しやすい支援を構築するものである（Lucyshyn, Horner, Dunlap, & Albin, 2002)。とくに後者は，生活の質の向上を目標としたPositive Behavior Support（PBS: Carr, Dunlap, Horner, Koegel, Tunbull, Sailor, Anderson, Albin, Koegel, & Fox, 2002）に根ざしている。

PBSの要となる方法論は，行動原理に基づいて，個人の行動をその先行条件と結果条件との機能的な関係から分析する機能的アセスメント（O'Neill, Horner, Albin, Sprague, Storey, & Newton, 1997）である。それを基に，子どもの行動に関係する周囲の状況やかかわりを改善し，子どもが適応行動を起こしやすい環境を構築する。

このことから，保護者が機能的アセスメントを学ぶことによって，子どもの理解や対応の見通しが促進し，それは生活の質の向上につながると考えられる。そこで，このようなPBSをベースとして，保護者を対象とした学習会の効果が検討されている。例えば，武蔵（2004）は，保護者が子どもの行動を分析し，支援を考える学習会を実施し，保護者の記録や評価を検討した。その結果，全般的な子

どもの理解や対応の見通しは促進したが，実際の支援につながる分析は困難であったこと報告している。このことから，保護者の困りを子どもの具体的な行動として分析できるように工夫すれば，実際の支援につながる検討ができるようになると考えられる。

そこで本研究では，発達障害のある子どもの保護者を対象として，保護者の困りを子どもの具体的な行動として分析するための子育て支援シートを用いた学習会を実施し，保護者の記録と評価を基に効果と課題について検討することを目的とした。

Ⅱ．方法

１．参加者

参加者は，岐阜大学教育学部附属特別支援教育センターで実施しているペアレント・サポート・プログラム（PSP）に参加した14名であった（表１）。文書により，研究の目的，方法，結果の公開について説明し，研究協力の同意を得た保護者であった。子どもは，幼稚園から高校までで，自閉症，広汎性発達障害，アスペルガー障害の診断を有していた。

表１　参加者のプロフィール

参加者	子ども	困り
1	幼稚園	何でも口に入れる
2	小１	子育て
3	小３	食べ物をこぼす
4	小４	言うことを聞かない
5	小４	兄弟げんか
6	小５	宿題
7	小５	忘れ物
8	小５	朝の支度
9	小５	要求表現
10	小６	宿題
11	中１	忘れ物
12	中３	自主的な学習習慣
13	高３	朝の支度
14	高３	母親に反抗

２．学習会

学習会は，発達障害のある子どもの保護者を対象として，子育ての困りを整理し，見通しを得ることを目的として，年５回（５月，７月，９月，10月，12月），各２時間実施された（表２）。学習会は筆者が進行し，機能的アセスメントに関する大学院の講義を受講した教師や臨床心理士３名がファシリエーターとして参加した。

表２　学習会の構成

回	内容
1	PSPの考え方・方法を知る
2	記録を基に検討（目標行動の考え方）
3	記録を基に検討（手だての考え方）
4	記録を基に検討（さらなる工夫）
5	記録を基に検討（子どもの育ち）

学習会には，表 3 に示した子育て支援シートを用いた。これは，O'Neillら（1997）の機能的アセスメントを基に，次のように工夫した。まず，①保護者の困りを具体的な場面や子どもの行動として分析するために，日課表による整理から開始する。次に，②具体化した行動を対象として，それに関係している状況や対応を整理する。それに基づいて，③行動原理から支援を考え，目標行動（めあて）と手立て（工夫）を記入する。④考えた支援を行い，子どもができたかどうかを○△で記録し，わかったことを整理する。

表 3　子育て支援シート

お子さんの行動を見て、整理してみましょう。お子さんの理解が深まり、自分が工夫していることが見えてきます。そして、もう一歩の工夫をみつけましょう。

1　困りを具体化しましょう
2　支援を考えてみましょう
3　支援を行い、見届けましょう
4　記録を基に、成果を確認しましょう

1　困りを具体化しましょう

日課表

①		②	③	④	⑤	⑥
時　間	日　課	様子	困った行動	いつ頃から	どのくらい	困り
7：00	起床	○				
	排泄	×	トイレで水を流し続ける	小 1	月に数度	○
	朝食	×	食べ物をこぼす	幼稚園	週に数回	○
	着替え	×	自分で着ない	小 2	毎日	◎
8：15	登校	×	遅れそうになる	小 2	毎日	◎
16：00	下校	○				
	自由	×	棚から物を落とす	小 2	月に数回	◎
19：00	夕食	○				
	自由	○				
	入浴	○				
21：00	就寝	○				
①		②	③	④	⑤	⑥
時　間	日　課	様子	困った行動	いつ頃から	どのくらい	困り

支援する行動を1つ決めましょう

２　支援を考えてみましょう

	Ａ　どんな状況	Ｂ　どんな行動	Ｃ　どんな結果
現状	・ ・ ・ ・	・	・ ・ ・ ・
これから	・ ・ ・ ・	・	・ ・ ・
工夫	・やりやすい設定や物 ・分かる伝え方 ・きっかけの手がかり ・スケジュールや手順 ・見通しがもちやすい流れ	・お子さんがしている行動 ・すぐにできそうな行動 ・お子さんが好き、得意 ・保護者が促しやすい ・１週間続けられる	・できる ・欲しい物が得られる ・誉められる ・認められる ・成果が見える

①問題をうまく避ける：困った行動につながる状況を変える。
②適切な行動を教える：適切な行動をしやすい状況を取り入れる。
③代わりの行動を教える：要求をかなえる代わりの行動を教える。

３　支援を行い、見届けましょう

めあて（目標行動）	土	日	月	火	水	木	金	備考
支援（工夫）	土	日	月	火	水	木	金	
	土	日	月	火	水	木	金	
	土	日	月	火	水	木	金	
お子さんができたこと								
お子さんができなかったこと								
わかったこと・工夫すること								

各回の内容は，①解説，②グループワーク，③報告から構成された。まず，①筆者が参加者全員を対象として，行動原理に基づいた情報の整理や支援の考え方を解説した。その際に，ファシリエーターをモデルとしてデモンストレーションを行った。その後，②参加者は幼・小・中高の３グループに分かれて，ファシリエーターの進行により，子育て支援シートの記録を基に，「子どもができる状況とできない状況」を話し合った。最後に，③参加者は，グループワークから「わかったこと」を参加者全員に報告した。筆者は保護者が発見したことや工夫したことをフィードバックし，また必要な助言を行った。５回の学習会終了後に，参加者は「わかったこと」をレポートにまとめた。

３．評価方法

１）保護者の記録

保護者が子育て支援シートに記録した「目標行動」「手立て」「わかったこと」に関して，記述の有

無，内容の具体性等を評価し，その変化を分析した。

2）保護者による事後評価

最終回終了時に，学習会に関する事後評価として，全体的な満足度や子どもの理解や対応等に関する6項目について，「あてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「あてはまる」「とてもあてはまる」の5段階評価とその理由（自由記述）の回答を得た。各項目について，「とてもあてはまる」「あてはまる」を肯定的回答とし，その回答数を全回答数で除して，肯定率（%）を算定した。

Ⅲ．結果

1．保護者の記録の変化

表4に，保護者の記録に関する各回の分析結果を示した。

表4　保護者の記録の分析

分析項目/学習会		1	2	3	4	5
目標行動	記述有り	10	10	14	14	14
	具体的	2	6	12	13	13
手立て	記述有り	5	5	10	12	14
	具体的	1	4	8	10	13
わかったこと	記述有り	/	10	10	12	14
	子どもができる状況	/	5	7	10	14

表中の数字は人数

学習会の進行に伴い，「目標行動」「手立て」「わかったこと」のいずれについても，記述人数が増加した。「目標行動」については，具体的に記述する人数が増加し，また対象や基準の見直しも記述されるようになった。「手立て」についても，具体的に記述する人数が増加し，環境設定や活動の仕方が記述されるようになった。「わかったこと」については，最終的に全員において子どもができる状況を記述するようになった。

2．保護者による事後評価

図1に，保護者による事後評価結果を示した。

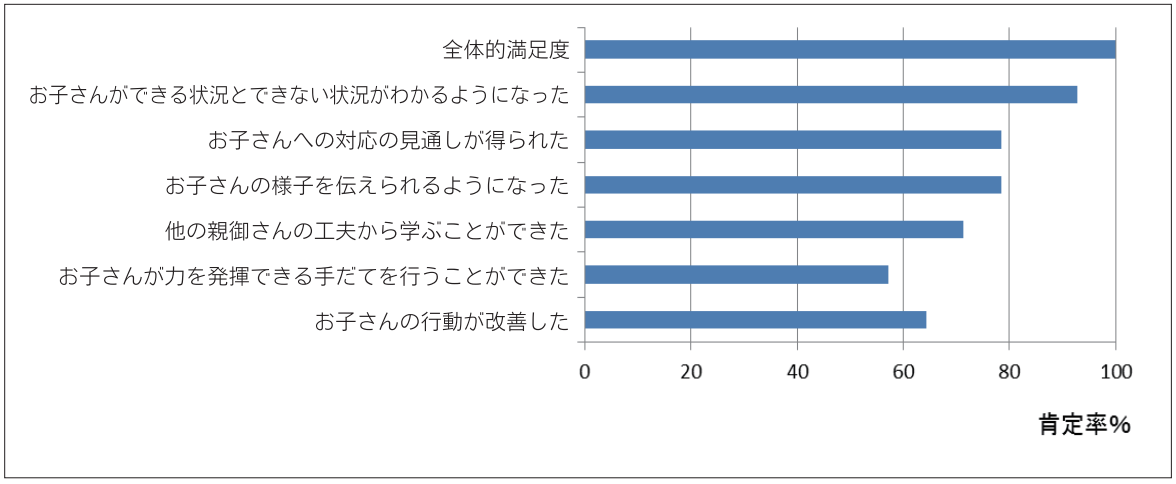

図1　保護者による事後評価

「全体的満足度」の肯定率は100％であり，次いで「お子さんができる状況とできない状況がわかるようになった」は93%,「お子さんへの対応の見通しが得られた」と「お子さんの様子を伝えられるようになった」は79%であった。一方,「お子さんが力を発揮できる手立てを行うことができた」は56%,「お子さんの行動が改善した」は65％に留まった。

表５に，保護者による事後評価における自由記述の分析結果を示した。

表５　保護者による自由記述の分析

項目	ニーズ	内容・方法	その他
良い点	・何に困っているかわかるようになった ・困りを話せるようになった ・漠然とした不安が減った	・子どもの育ちが見えてきた ・工夫の仕方がわかった ・できないことの理由がわかった ・自分ができていることがわかった ・他の親御さんの話がヒントになった	・子どもの実際の様子から考えること
困難点	・特定の困りでなく、子育て全般が学びたい ・深刻な行動の改善 ・学校での対応 ・家族の協力を得ること	・目標設定が低すぎた ・目標を決めるのが難しかった ・目標を広げるのが難しかった	・PSPの開催時期が子どもの実態と合わない

良い点として，困りの具体化，子どもの理解や対応の見通し，子どもの実際の様子から支援を考えることが挙げられた。困難点として，ニーズの違い，目標設定や拡大の難しさ，学習会の開催時期等が挙げられた。

Ⅳ．考察

本研究では，発達障害児の保護者に対するPBSに基づく学習会について，保護者の記録と評価を基に検討した。その結果，学習会の進行に伴い，保護者の記録においては，目標行動や手立て，わかったことに関する記述が増加した。それも，目標行動や手立ては具体的になり，子どもができる状況は全員が記述するようになった。このことは，保護者の困りを具体的な行動として分析する子育て支援シートの有効性を示すものと考えられる。

PBSの中心的な方法は，行動原理に基づいて情報を整理し，支援を考える機能的アセスメントである（O'Neill et al., 1997)。それを保護者が行うためには，実際の支援につながる子どもの行動の分析が課題となる（武蔵, 2004)。そのために，本研究では，日課表を用いて，保護者の困りを場面や行動として具体化し，それらに関係している状況や対応を整理し，支援を検討した。また，考えた支援について，子どもができたかどうかを記録し，それを基に子どもができる状況とできない状況を検討した。それを繰り返す中で，保護者は子どもの行動を見ながら，自身が行っている対応や工夫との関係性を捉えられるようになり，それが記録の変化に反映されたのではないかと考えられる。

このような学習会について，保護者の満足度は高く，子どもの理解や対応の見通しについて肯定的に評価された。本研究の参加者は，研究に賛同し，参加を希望した保護者であり，肯定的な評価が得やすい可能性はある。ただし，そうした参加者においても，機能的アセスメントの意義を示す「お子さんができる状況とできない状況の違いがわかるようになった」は９割を超えた。また，グループでの学習会の利点を示す「お子さんの様子を伝えられるようになった」や「他の保護者からの学び」も高く評価された。このことから，保護者の困りを具体化して分析する学習会は，実際的な子ども理解や対応の見通しを促進するといえよう。

一方,「お子さんが力を発揮できる手立てを行うことができた」や「お子さんの行動が改善した」は６割台に留まった。武蔵（2004）の研究でも，対応の実行は３割程であった。すなわち，今回のような学習会だけでは，必ずしも対応の実行や子どもの行動変容にはつながらないと考えられる。それ

を改善するためには，自由記述に示されたような支援ニーズや内容・方法の困難点について，個別に検討していく必要がある。さらに，本研究では，子どもの状態や保護者の状況，家庭環境に関するアセスメントは十分ではない。今後は，これらのアセスメントに基づいた検討が必要である。

付記

本研究は，日本特殊教育学会第52回大会自主シンポジウム「専門家による保護者支援の多様なアプローチ」において発表した内容を基に作成した。

文献

1) Carr, E. G., Dunlap, G., Horner, R. H., Koegel, R. L., Tunbull, A. P., Sailor, W. , Anderson, J. L., Albin, R. W., Koegel, L. K., & Fox, L. (2002)：Positive behavior support: Evolution of an applied science. Journal of Positive Behavior Interventions, 4, 4-16, 20.
2) 武蔵博文 (2004)：積極的行動支援モデルによる障害児の親支援教室の試み．富山大学教育学部紀要，58，93-108.
3) Lucyshyn, J. M., Horner, R. H., Dunlap, G., Albin, R. W., & Ben, K. R. (2002)：Positive Behavior Support with Families. In J. M. Lucyshyn, Dunlap, G., & R. W., Albin (eds.) Families & Positive Behavior Support：Addressing problem behavior in family contexts, 3-43. Paul H Brookes.
4) O'Neill, R. E., Horner, R. H., Albin, R. W., Sprague, J. R., Storey, K., & Newton, J. S. (1997): Functional assessment and program development for problem behavior：A practical handbook. Brooks/Cole Publishing Co.
5) Stocco, C. S. & Thompson, R. H. (2015)：Contingency analysis of caregiver Behavior: Implications for parent training and future directions. Journal of Applied Behavior Analysis, 48, 417-435.
6) 山上敏子監修 (1998)：お母さんの学習室：発達障害児を育てる人のための親訓練プログラム．二瓶社.